

水谷嘉浩さん

●Jパックス株式会社代表取締役
避難所・避難生活学会理事

ストップ・ザ・雑魚寝！ 二次健康被害を防ぐため、避難所では段ボールベッドの利用を

段ボール会社を営む水谷嘉浩さんは、二次健康被害防止のための段ボールベッドを考案し、避難所に届ける一方、すべての段ボール会社に設計図を公開し、自治体と防災協定を結び、全国どこへでも段ボールベッドをいち早く届けられる体制づくりに取り組んでいる。

●聞き手……編集部

東日本大震災をきっかけに 段ボールベッドを開発

—水谷さんが段ボールベッドの開発に至った経緯を教えてください。

水谷 私は大阪・八尾市で段ボールの製造販売を営んでいます。大阪近郊が営業エリアなのでめつたに出張はないのですが、7年前、たまたま東京に出張に行ったときに東日本大震災に遭遇しました。大きな揺れを体験し、東北の津波の映像をテレビで観

て、ものすごくショックを受けました。その後、避難所に避難した方たちが、低体温症で大勢亡くなっているという話を聞きま

した。それまで私は、避難所は、安全な場所だからこそ「避難所」だと理解していましたが、段ボールには保温効果があるので、段ボールで寝床を作れば低体温症を予防できるのではないかと思いつきました。そしてすぐに段ボールベッドの開発に取りかかりました。実は以前から自分には、何か社会の役に立ちたいという思いがあったのです。

—続けることができました。

—信じられないようなお話ですね！

水谷 本当に有り難いと思いました。ご先祖様が、天の神様か分からないけれど、何か自分の背中を押してくれていると感じました。この出来事がきっかけで、会社の存在意義とは何か、従業員のため、お客さんのため、社会のために、社業を通じて何

—社会の役に立ちたい—そう思ったきっかけは？

水谷 幼少のころは、実家が会社経営をしていましたから、裕福というわけではないけれど、何一つ不自由なく過ごしていました。社会に出てからは、修行のために大手の段ボール会社に勤めたのですが、修行を終えて実家に帰ってきたら、会社がほぼ破綻状態になっていたので。親父に呼ばれ、「万策尽きて、今月末、もう手をあげるしかない」と宣告されました。でも、うちに

ができるのかを真剣に考えるようになったのです。

まずは従業員を守ることを考えました。そのころはリストラがさかんに行われていた時期でしたが、うちではパートさんも全員格上げして100%正社員にしましたし、障害者も社員の10%を基準に雇用して、子ども手当は毎月1人につき2万円を支給しています。解雇は絶対にしません。そこだけは、こだわっていいことと思ってやっています。

設計図を公開し、災害時にいち早く避難所に届けられる体制に

—今はミカン箱を包んだような形の段ボールベッドですが、最初から今の形だったのでしょうか？



Profile

●みづたに・よしひろ●

東日本大震災直後に段ボールベッドを考案。7年間で200か所以上の避難所を訪問し約1万床を届けた。また段ボール企業と行政との防災協定を全国に広げる取り組みもしている。さらに二次健康被害を防ぐため、避難所に関する研究を行いながら避難所・避難生活学会の発起人の一人として設立に加わった。

は段ボールとトラックがあるので、いつでも逃げられるか?!と腹をくくりました。そうしたら、支払期日の直前に、親父が「大変だ!」と言って、慌てて私を呼び出したのです。うちには意識がほとんどない状態の寝たきりの祖母がいたのですが、その祖母が長年積み立てていたものが満期になったと郵便局から連絡があったのです。まるで天から降ってきたような話です。そのおかげでなんとか支払いができて、会社は存

水谷 当初は、段ボールを細長く切って、ミルフィーユみたいに積み上げて、桁のように5、6列並べた上に段ボールの板を2枚敷き、その周りを囲って低いベッドを作りました。全部のりで貼っての手仕事なので、200台作るのに、社員総出で3日かかりました。これではあまりに手間がかかるので、発想を変えて、簡単に既存の機械で作れるように設計し直して、現在の「段暖はこベッド」になりました。段暖はこベッドは生産がとても簡単で、1社で1日に何千台も作れます。

段ボール社は全国に約3000社、大手だけでも400工場くらいあり、1県あたり10社近くあります。考えてみたら、これはインフラですよ。使わない手はないと思いました。機械で作れる段ボールベッドであれば、防災協定さえ結べば全国どの会社でも素早く仕上げて、いち早く近隣の避難所に届けることができます。

暖段はこベッドは日本中のほとんどの会社で生産できるように設計してあるの、全国段ボール工業組合連合会に、お金はいらないからこの設計図を使って災害時に段ボールベッドを作ってほしいと訴えました。そして5年の検討の末、採用してく

行きましたが、縄文人だって寝床がありました。

— 低体温症以外の雑魚寝の問題点はなんですか？

水谷 エコノミークラス症候群になりやすくなるということです。最近の調査では、避難所でのエコノミークラス症候群は、意外に女性に多いということが分かっています。女性は周りに気を使ってトイレに行かなくて済むように水分摂取を控えがちなので、なりやすいのかもしれない。

血栓というのは、そもそも出血を止めるためにあるものです。シマウマがライオンにガブッと噛まれたら出血するでしょう。すると体の中では出血を防ぐために血が固まろうとするわけです。災害時のストレスは、ライオンにいられたときと同じ状態です。医師によると、一度血栓を作ってしまうと、10年後、20年後も再発リスクが高いそうです。中越地震の被災地では、今も脳梗塞が多いそうです。だから急性期に血栓を作らない、避難所で血栓を作らないことがすごく大事なのです。

れることに決まったのです。現在では、段ボール企業や業界団体と行政との間で、防災協定を結び取り組みを進めていて、全国の6割の道府県と締結しています。防災協定を結べば、今までの私的な無償支援と違って、有償で責任ある支援ができるので、被災者全員にベッドを届けることができます。

雑魚寝は低体温症やエコノミークラス症候群を引き起こす

— 災害時にスムーズに提供できる環境がそろったわけですね。

水谷 実は、それほど簡単ではありませんでした。防災協定を結んでいるのに段ボールベッドの要請がなかったという被災地もいくつかありました。災害救助法の観点から、県と協定を結んでいるのですが、住民の安全を守る義務があるのは市町村なので、市町村が欲しいと言わないと、県は市町村に供給できないわけです。市町村はというと、避難所で「ベッドが欲しい人いますか？」と言って希望を取るわけですが、住民は段ボールベッドのことなど知りませんから、「段ボールベッド？ 何それいらな

— 避難所・避難生活学会の理事もされていますよね。

水谷 実は、私は学会設立の言い出しっぺの一人なのです。北海道赤十字看護大学の根本昌宏先生とある学会で意気投合し、避難所にフォーカスした学問がないということだったので、「やっちゃおう？」ということになって、石巻赤十字病院の植田信策先生など有志の先生に声をかけ、新潟大学の榛沢和彦先生に理事長になってもらいエコノミークラス症候群を一つの基準にして、学会を作りました。学会って、設立宣言するだけでできるんですよ。もちろん組織だつてやらなければなりません、あまり形式ばるんじゃなくて、「動ける学会」にしよう。医療者、法律家、経済学者、NPO、被災者、マスメディア、さまざまな方々に入ってもらって、ただ文句ばかり言うんじゃなくて、解決する対策を提案する学会にしたいと思っています。

— 最後に読者に伝えたいことは？

水谷 人けのない山奥で地震が起きたり土砂崩れが起きてても、災害とは言いません。



幅90センチ×長さ190センチ、高さ35センチで通常のセミシングルベッドと同様のサイズ。高さは車いすとほぼ同じ高さ。ベッドの端に手をかけても傾斜することなく、約6トンに耐えられるだけの強度がある。段ボールは空気層できているため温かく、低体温症に対し効果がある。また、段ボールベッドを使った避難所では血栓の発症が少ないことが分かっている。値段は1台7~8千円で、防災協定を結び、災害時には半額で導入できる。

い」ということになるわけです。

「水が欲しい人いますか？」「トイレを使いたい人いますか？」「寝たい人いますか？」 それと同じように、ベッドは必要不可欠なものです。冷たくてかたい床に寝たことがありますか？ 耐え難いものです。欧米でもアジアの避難所でも簡易ベッドは常識です。日本人は昔からベッドじゃないと言うけれど、一段高い畳は土間とは違います。日本人だつて土間に寝る人はいないので。先日古代遺跡を見学に

そこに人間の生活があつて、生命や暮らしが脅かされたときにはじめて災害と呼びます。だけど何もかも便利な世の中になってしまつて、私たちの五感鈍っています。たとえば昔は食べ物腐っているかどうかを判断するには臭いを嗅いだり味をみたりしていたけれど、いまは賞味期限が切れていけば捨ててしまいます。こういうことが、生存本能を鈍らせているような気がしてなりません。備えも大事だけれど、人間の持つ瞬発力や勘はいざというときに命を守ります。便利な世の中と災害は裏腹で、都市化自体が災害を作っているような気がしてなりません。究極の防災は、人口の分散ではないでしょうか。

一方で、各方面からこれだけ警鐘を鳴らしているにもかかわらず、災害関連死はいつこうに減りません。直近の災害でも、死亡した人の8割が関連死でした。防ぎ得る死はなくなければなりません。国や自治体も、「国民を災害から守り抜く」という強い姿勢がもつと必要なのではないでしょうか？ これからも「ストップ・ザ・雑魚寝」をスローガンに、全国を駆け回っていききたいと思います。